

中国に引き渡され、四月に義勇隊員全員が解雇された。その後は満州人に雇われ幾ばくかの賃金を受け罵倒されながらも、日本に帰るまでとはと、すべてを我慢した。

七月、コロ島から乗船し、船は動いた。

引揚げて父の農業を手伝っていたが、二十四年名古屋市消防士を拝命、四十六年に消防士長、五十六年に消防司令補に昇任、六十年に定年退職、その後在任期間の好成績を認められて、名古屋市自主防災組織指導員として平成三年まで勤務した。その後も望まれて、名古屋市中央区栄地下センターに入社して、現在に至っている。

修三氏は敬老の心厚く、同僚から信頼され、後輩をいづくしむ性格であるが、これは満州での二年四カ月、悲喜交々の労苦を体験された際に、自ら鍛えあげた力であろう。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

亡き父の拓魂に学ぶ

愛知県 板倉博明

私の小学校三年生のときでありました。昭和十二年の七月小学校の先生から支那事変の始まったことを知らされ、中国の南京陥落のときは、戦勝を祝して村では提灯行列を行い、出征兵士を歓呼の声で村はずれまで見送った。やがて戦死者の遺骨が白木の箱で村へ帰って来るようになった。日本軍戦勝の声はいつしか消えていき、やがて村には米や物資が不足して統制経済となり、村は疲弊していった。

このころに、日本政府はソ連国境を守り食料増産を計画して黒龍江省一带へ満州開拓者を募集して入植させていた。父は友人の勧めで満州大陸に大きな希望と夢を抱くようになって、満州開拓移民に応募した。そして満州へ現地研修に六か月間行って帰ってきた。父は家族に現地の状況を説明しながら満州へ行くことの

同意を求めていた。母は満州へ行けば二度と日本へは帰れなくなると反対していた。伯母も高齢になってからそんなところまで行って死にたくはないと反対した。親戚は子供がもうすぐ学校を卒業するから満州へ行かなくてもよいと反対。どうしても満州へ行きたいのなら親戚の縁を切って行けと父は叱られていた。父は満州の現地を下見しているので家族の反対はそのとおりで思ったことでしょう。しかし、満州へ行くと応募していったん決まった以上は村へも顔向けができない。国策である開拓移民を取りやめることは父にはできなかったのだと思う。

さて、我が家の満州への出発時期は昭和十六年の秋と決まった。畑や家屋敷の資産を売り払ったり、荷物を満州へ送ったりして準備を完了した。満州へ出発の日、昭和十六年十月の中ごろであった。出発の夜は親戚や近所の人たちが来て、泣きながら別れのあいさつをしていました。出発の時間は午後十一時ごろでした。暗い夜道を家族十二人で小さな子供は父が背負い、母が手を引いたりして五時間ほど歩いて、明けの一番

発の電車に乗って新潟經由で舞鶴出港の船に乗船した。船中で一泊し、朝鮮の清津に入港して汽車に乗り、牡丹江經由で桂木斯に一泊。松花江の船中で一泊して清河鎮の埠頭へ日本を出発して四日目に到着した。清河鎮の街から北へ四里、行った所が現地の三江省通河県大古洞開拓団であった。そこは見渡す限りの大平野で、草は枯れて寒い秋風が吹いていた。遠くかなたには小さく点々として開拓部落が見え寂しい所であった。小さな弟や妹を家族の者が背負ったり手を引いたり、伯母もいて朝から歩き通して、夕方開拓部落に到着した。大きな土塀に囲まれて二世帯住宅が十二戸ぐらい建っていた。部落の人たちが出迎えて歓迎してくれた。私たちの入る家は新築したばかりで屋根は草葺きで土壁であった。室内は天井も壁も日本の古新聞が貼ってありました。その日の夕食は部落からいただいた高粱を炊いて夕食にしたが、だれも食べられなかった。暗いランプの明りの下で家族の者は皆無口で、小さな兄弟たちは食事がないので泣いていた。よい話を楽しみながらも満州へ来たがやはり失望した。その翌日からは

住宅の越冬準備、防寒設備のオンドルやカマド造りを父が受け持った。私は燃料にする薪とりに出て広野のところどころにある木を探して切っては一本ずつ家に運んだ。満州では草を燃料とするカマドの構造でなければならぬ。私は家の越冬準備が終わったので、昭和十六年十一月三十日に国民学校高等科一年に入學した。同十二月八日に第二次大戦が始まった。外地での戦時体制下ですから学業より戦争の行方に緊張していた。

昭和十八年に国民学校を卒業してから青年学校に入り、関東軍からの検閲指導があつて軍事教練の日が多くなり、開拓の食糧増産（農業）に従事する日が少なくなつていった。昭和十九年になると開拓団に召集令状が来るようになって農業はできなくなつた。残るのは女や子供ばかりとなり、馬を飼育することができなくなつて馬を銃殺していった。昭和二十年になると部落の警備指導をする者もいなくなつた。八月十日に開拓団本部より伝令が来た。「ソ連軍が満州へ攻めこんできた。男子十七歳から四十五歳までの者は全員召集。

集合場所は清河鎮の埠頭前に十六時までに集合せよ。入隊命令は牡丹江司令部で受領せよ」ということであつた。部落の人たち全員が集合して神社に参拝し、部落の人たちと最後のあいさつをした。父が清河鎮まで送つて来てくれたのが最後の別れとなつた。集結地には四百人ぐらい集まつていた。奥地の開拓団の人たちは集合時間に間に合つたのかどうか分からないが、出発時間がきたようで、点呼もせず到我々を乗船させ船は桂木斯に向けて出発してしまつた。その夜は甲板でリュックにもたれて眠つた。

朝八時ごろ桂木斯埠頭に着き下船した。既にそのときは、桂木斯の街には人影もなく商店の戸はみな閉まつていた。人通りのない街を歩いて桂木斯の駅に着くと、その周辺には何万人もの避難民が集結しており、駅に近付くことはできなかった。牡丹江行の鉄道はソ連軍に爆撃されて牡丹江へは行けなくなつていた。桂木斯の特設警備隊へ入隊することになつた。そこは関東軍が撤退した跡の空兵舎であつた。桂木斯周辺の開拓団から動員召集をかけられた人たちが集結していた。

ここで私服から軍服に着替えた。武器と言えば、旧式の三八歩兵銃で実弾は一発もない。銃は兵の数だけはない。銃のない者は帯剣だけである。これで軍装備は終わったものとして、二千人の兵は部隊広場に整列して部隊長より命令を受けた。「この部隊は日本人避難民を護送して日本へ送り届けることを任務とする。日本人としてこの桂木斯から引き揚げるのはこの部隊が最後である。日本軍の公共施設は全部を焼き払え。この部隊の出発は今夜八時である。任務を終了した小隊は出発時間までに桂木斯駅に集合せよ」私の中隊は桂木斯駅周辺の警備であった。各中隊はその任務に就くために午後二時ごろに部隊を解散して出発した。駅に到着する前にもう街の各所から黒い煙と火の手があがっていた。私たちの中隊は夕食準備のためにホテルなどの建物を壊して中に入って米を捜し出し、食事をつかった。ホテルの中は営業中、そのままの姿であったから緊急な避難であったと思う。中隊の食事を持って駅に行くとは避難民はもう出発していなくなっていた。辺りは既に暗くなり、桂木斯の街は赤々と燃えていた。

任務を終えた中隊から駅に集結してきた。人員の整った中隊から順次貨物列車に乗り込んでいった。発車の準備完了で貨物列車はハルビンに向かって出発した。桂木斯の街は火の海となっていた。朝になると列車は止まっていた。どこまで来たのか疲れて眠っていたので分からない。鉄道は破壊されていたので前に進むことはできない。北滿の朝は八時でも、もう寒かった。近くから襲撃されたので下車することもできない。銃はない。実弾はないので床に伏せていた。前方列車の実弾所有部隊が下車して応戦したので次々と下車して応戦態勢を整えていく。大部隊であったので土民軍は退散していった。破壊された鉄道の修理をする機材がないので出発することができない。ソ連の空軍機に攻撃されるので列車にそのまま乗っていることはできない。兵は草原に分散してかくれ、日暮れになるのを待った。鉄道の修理を完了して暗くなってから出発した。鉄道が壊されていて列車は早く走ることができないので、幾日もかけてやつと慶安の駅に着いたが、そのときに日本が戦争に負けたことを中国人から知らされた。

綏化の駅に着くとソ連軍によって列車は停車させられた。私の部隊はここで下車して関東軍が撤退していなくなった後の空き兵舎へ入った。

飛行場へ行くと各地から逃げて来た女、子供、老人の避難民がひしめいていた。格納庫や兵舎、倉庫には食べ物もなく、飢えと病気で見渡す限り大勢の難民がゴロ寝をしていた。飛行場の空地には毎日難民を土葬した盛土の墓が多くなっていった。ソ連軍の命令によって日本軍の武装解除と降伏の日がきた。その日には飛行場の滑走路に銃や帯剣、軍刀を並べ、日本軍は整列して両手を上げて降伏のポーズをとられ情けない姿であった。ソ連軍は大型のバスをゆつくりと走らせながら、バスの屋根の上から大きな撮影機で記録フィルムに撮っていった。この後にソ連軍司令官が日本人通訳を連れて来て、日本軍に対する訓示があった。ソ連軍は世界人民の平和のために戦って名誉ある勝利をおさめた。ソ連の偉大な指導者に、日本軍は従えと言う内容の訓示であった。ソ連軍の観閲を受けた後、日本軍の総人員を確認してからソ連軍は日本軍の捕虜

を收容所へ入れた。大勢の難民はその後どうなったのか分からない。開拓団に残してきた家族も難民となっていることであろう。今ごろどうしているかと心配であった。收容所では仕事はなかったが、毎日一人一人の履歴調査や兵歴調査が続いた。自分たちの部隊は桂木斯の日本の施設である街や軍事施設や発電所など重要施設を爆破、放火してきたからシベリアのウラル山脈の收容所に連れていかれ殺されるとか、放火を命令した部隊長は銃殺されたから、もう收容所にはいないとか毎日のうわさ話に不安が募るばかりであった。桂木斯から開拓団に帰ればよかった。入隊したのが間違いであった。私服で難民の中におれば捕虜にならなかつたとか、話をしてくやしがつた。一週間も過ぎたころからソ連軍より作業員の使役命令がくるようになった。駅にある鉄道レール、石炭、倉庫にある穀物や衣服などの戦利品を貨物列車に積み込む作業をやらせて、それをソ連へ持ち帰るためなのである。ソ連兵は日本兵に、「早く荷物を貨物列車に積み込みをせよ。作業が終われば日本兵はウラジオストクから帰すから早

く積み込み作業の能率をあげよ」と言っていた。

九月末ごろ、貨物列車に日本兵は乗せられ、外から鍵をかけられた。中は薄暗いこの列車は北に向かつて走っているのだから、黒龍江省からソ連に入り、シベリアへ連れていかれると友人と話し合っていた。

駅に停車するたびに小さな窓から外を見ると北安の駅までできていた。人影もなく駅舎は破壊されていた。黒河に着いて下車し日本軍の空き兵舎に入ったが、食料がないので郊外に出て収穫の終わった畑で馬鈴薯を捜したり、農家の迷い豚を捕えたりして食料となる物を捜した。ここではソ連兵の監視はなかった。黒河の対岸はソ連のブラゴエシチエンスクの街であった。樹木に覆われて外からは街の中は見えない。黒河の街は樹木が多く立派な建物が建っているが、国境の街は空の建物を建て相手に発展したところを見せているのだそう。四日ぐらい過ぎてからソ連軍に連れられ、船でブラゴエシチエンスクに渡った。そこは大きな建物、大きな道路があっても人影はなかった。日本兵は検疫の後、すぐ貨物列車に乗せられて、外から鍵をかけら

れた。貨車の屋根の上にはソ連軍が銃をもって監視していた。貨物列車が発車すると昼、夜何日間も走っては、何日間も停車している。ソ連の子供たちが貨車に寄って来て、窓から日本兵の荷物を盗みに来る。同じことを繰り返しながら一カ月もかけて、クラスノヤルスクに着いた。日本兵はここで下車し、ソ連軍に取り囲まれて捕虜収容所に向かつて歩いた。沿道では住民が寄って来て子供たちは日本人捕虜に向かつて「バンザイ、ハラキリ」とか「サムライ、ハラキリ」とか罵声を浴びせてきた。収容所に着くと、そこは古い兵舎のような建物で、監視所のついた嚴重な鉄条網で囲った収容所であった。一室二十人で各室に入れられた。入所間もなく土工作業に出るようになった。一日の作業に疲れ果て空腹で帰って来ても、三百グラムの黒パン一つだけで満腹にはならない。収容所の夜は、空腹と寒さで眠られない。故郷の話や、食べ物の話ばかりをして寝た。

十一月になると本格的に作業が始まった。ソ連指令より前夜の内に各班へ明日の作業現場への人員の割り

当てがきた。朝七時に収容所前の広場に全員整列して点呼を終わってから各作業現場ごとに、ソ連兵の監視が日本捕虜を連れて行く。一日中監視がついている。しかし、日本人捕虜は栄養失調で体力がなくて仕事はできない。ソ連の監督から「ダバイ、ダバイ」仕事をやれとどなられた。一日中働いて収容所へ帰っても、三百グラムの夕食の黒パンを食べるだけで、毎日日本へ帰ることと家族のことを思い出して気が沈んでしまう。十二月になるとシベリアの寒さは零下四〇度になる。霧がかすんだように白夜になって太陽は見えなくなる。寒さと栄養失調で体は動かなくなる。スコップをつえにして立っただけになる。寒さも空腹も忘れて眠くなり、気が遠くなっていく。眠れば凍死するので腰は下ろさないようにした。一日の作業を終えて収容所に帰る。夕食のパンを楽しみながら食べた。いつもは夕食が終わって寝るとだれかが故郷や食べ物の話をしていたが、だんだんそんな話もなくなった。朝になると死んでいる人がいたり、腰の立たない人がいた。こんなことが続いてソ連軍指令部より日本人捕虜

の身体検査をして一人一人に栄養失調による衰弱の度合いで一級が上、二級が中、三級が下、とした等級をつけて三級とつけられた人は一カ所の部室に集められる。そのうちにみな死んで逝った。日本人捕虜が死亡するのは食事の管理にもあった。翌日の昼食弁当分のパンを夜のうちに食べてしまい、翌日の昼食を抜いてしまうので体力が落ちて死亡してしまう。また、他人のパンを盗んで見つかり死ぬほど殴られたり、零下三〇度の営倉に入れられ朝になったら死んでいたなど、収容所内の日本人捕虜はだれもが生きて日本には帰れないと、自暴自棄になって荒れすさんできた。兵は上官にこき使われ態度が悪い、礼儀が悪いと言って足腰の立たないほど殴られていた。

ある日、作業現場の休憩時間に兵と共に中尉が腰掛けて休憩していると、ツルハシを持った兵が中尉の後から近づき、ツルハシを中尉の頭へ力まかせに打ち込んだ。中尉は即死した。その兵はソ連軍に連れられていった。ソ連の刑務所に入ったということで、その後は分からなくなった。また、兵が上官に復讐しっやうして上

官を殴ることがよくあった。日本は敗戦によって軍隊は解散したのだから捕虜収容所内は軍隊の継続ではない、一般の社会人の集団であることに気づいてきたものと思う。昭和二十一年の三月寒い冬も過ぎて春が来るころに、日本人捕虜の死亡した墓の整理に行きました。墓には大きな穴が幾つも掘ってあり裸の死体を棒積みにし、カチカチに凍った上にはシートを掛けて薄く土を埋め戻してあった。一人一人死体を取り出した。やせていて白骨化の死体と同じであった。首には名札を着けているので、だれであるか分かった。一人ずつ墓穴を掘って埋葬し墓標を立てた。収容所内がやがて平等の意識に目覚めだしたころ、ソ連指令部は社会主義教育をするようになった。皆、日本へ無事に帰りたいので社会主義思想に賛成のふりをしていた。教育指導員となった人は、作業にも出ない待遇もよい。反共を密告されると奥地の収容所へ送り込まれ帰国が遅くなる。日本捕虜が働いていた工事現場は、三年も経過して工事は完了に近づいてきた。ソ連人は日本捕虜に「スコラダモイ」近い内に日本へ帰れると言った。

昭和二十三年九月、帰国の日がきた。出発の当日は収容所前の沿道にソ連人が寄って来て、ロシア語で「日本人有り難う」とか「日本人さようなら」と言ってみ送りをしてくれました。出発してから一週間ぐらいでナホトカに到着した。ここではテントを張った仮宿舎に入った。この中は捕虜収容所ではないので、元上官がうっかり命令調で話をした。側にいた一人が「軍国調でもの言う反動分子は日本へは帰さないぞ」と叱つたら、「申し訳ありません」と頭を下げて謝っていた。早くから港に出て整列し、日本海を眺め船のくるのを何時間も待ちに待った。船は水平線のかなたから静かに入港してきた。白い船体に赤十字の旗が立っていた。甲板で白衣の看護婦が手を振っていた。これで待ちに待った日本へ帰れると嬉しかった。皆棧橋を走り上がるようにして乗船した。

船はゆっくりと埠頭を離れた。ナホトカの港が遠くなったころ、船内放送で「引揚者の皆さん、外地では大変な御苦労をされました。お帰りなさい」と看護婦さんのあいさつがあった。皆苦しかった日々を思い出

し泣いていた。船内の夜は夢にまで見た和食で感激した。その夜は安心してゆつくりと眠った。朝は食事が終わると引揚者書類の説明を聞き書類作成をした。入国のときに提出して検疫室に入り検疫をすませて、受付で引揚者証明書と帰国手当を受領して表に出た。引揚者を迎えに来た家族は、名前を書いた旗を振って名前を呼んでいた。舞鶴駅では長野行き旗を持った案内係の所へ寄って行つた。長野行きの人は一か所に集合して電車に乗った。同じ部隊から引き揚げて来た者は三人だけであつた。

京都から名古屋、長野県の塩尻に着いたのは朝方であつた。飯田線に乗り換え温田駅に下車し、新野へ行くトラックの荷物の上に乗せてもらった。新野の近くまで来たときに元の家のおじさんが曲がつた棒に日の丸の旗を付けて弟と二人で迎えに来てくれた。日本にはまだこうした気風が残っているのかと嬉しかった。十四歳のときに満州へ行き、昭和二十三年二十歳で故郷に帰ってきた。故郷の山や川、村の風景も子供のところと変わっていなかった。外地にいた年数が物す

ごく長く感じた。私の生まれた家は人手に渡っているが、その近くへ親戚から小屋を建ててもらつて、兄弟三人が住んでいた。私は開拓団で家族と別れて兵隊に行つたので、その後のことは分かりませんが、十三人いた家族が開拓団から引き揚げる途中で親や兄弟に死に別れ、三人の子供だけが引き揚げてきていた。翌日から私は隣、近所へ引き揚げてきたことのあいさつ回りをした。行く先々、昔の家、昔の顔で、満州へ行つた七年前と変わつておらず懐かしかった。ただ自分一人だけが変つたような気がした。親戚へは弟妹が先に引き揚げてきて寝る場所から生活の面倒まで見ていただいていたのであいさつに行つた。親戚では小さな子供だけが引き揚げてくる途中のかわいそうな出来事を聞かせてくれた。また、別の親戚へ行つたらおじさんが、「俺はあれだけ満州へ行くなと止めたのに、お前の親は満州へ家族を捨てに行つたようなものだ。故郷は落ちぶれてから帰るところではない。戦争はみんな被害者だ。引揚者だけが被害者ではない。早く被害者意識を忘れて、自力で立ち上がれ」としかられた。

私は黙って聞いているより仕方がなかった。くやしくて涙が出た。私は早く村を出たいと思っていたとき、村長さんより、開拓へ入植しないかと誘いがあった。

そこは豊田市伊保原の、もと海軍航空隊の跡地であった。戦後の自作農創設維持法によって、国から農業経営者に土地を売り渡してくれるというものだった。条件として国が個人に売り渡し、五年経過後に開墾成功検査をして、合格した者は本登記ができる。不合格者は入植の取消しとなる。配分面積は、畑一町歩に宅地一反歩であった。入植してからツルハシで開墾したが、飛行場の跡地だけに、粘土質の土に小石混じりで堅くなっており、舗装道路を開墾するようなものであった。「さて裸一貫では、生活ができないと考え、どうしても出稼ぎに行かなければならなかった。出稼ぎは、近くの土木工事現場で一日働いて、五百円だった。家に帰ると畑に出て、夜遅くまで開墾をした。期日までに開墾を完了しなければならなかった。終戦間もないころで、食べ物もお金もない時代であった。このころに、子供を持った親たちは、子供には食べさせても自分は

食わずに寝た。小学校へは、弁当を持たせてやれなかつた。母親は子供に飲ませる母乳がでないとか、悲しい話をよく聞かされた。やがて年数の経過とともに開

墾面積も多くなって、畑に作物を作れるようになった。この土地は酸性土壌といって直接作付けしても作物は育たない。借入資金で石灰や有機質肥料などを大量に

買い入れしなければならぬ。平坦な所なので、雨が降ったら水の流れて行く所がなく、畑は水溜まりになって作物の根が腐り、全滅となる。これらのことを解決するため、各種の事業資金を長期年賦払いで多額に借入れ投入し、排水工事や開拓の農業に一生懸命に従事してきた。開拓農業は自給自足の農業ではなくて多額な借入資金で販売農業生産物の収益で借入資金の返済をして、その残りで生活を維持していかなければならない。農作物は天候や病虫害、収量とかいろいろな障害が多くある。一度こうした災害に遭えば借入金金の返済はもとより生活もできなくなってしまう。開拓農家は様々な理由で、いつの間にか大きな負債を抱えてしまったのである。そこで私は、農業経営のため、い

ろいろな提案をして、農協の経営の立て直しに尽力をした。

戦後に他県や市外から豊田市に移住して、開拓の自治区をつくり、その地域を發展させていくために貢献し、交流も大切にしてきた。開拓の当初から国政、地方選挙には後援会をつくって、その時々で先生方から力添えをいただいで發展してきた。現在は名古屋、豊田間に新線が開通し、地域内には浄水駅ができて、市街化指定の大規模開発が進んでいる。農村から都市へと変わってきた。苦しかった開拓当時のことは、遠い昔の思い出になる。

【執筆者の横顔】

板倉氏は長野県の農家で昭和三年生まれの六十五歳である。

博明氏の父は大陸志向型だったので、その当時満州開拓の募集に応じ、県の派遣で現地研修に六か月間満州に渡って帰ってきた。父は満州の有力な現地説明に当たったが、伯母も母も家族のもの皆の反対にあり、

親戚のものは縁を切って行けと父をしかっていたのを博明氏は覚えていた。

しかし、父の決意は微動だにせず、畑と家屋敷を全部売り払って家財道具は満州に送り、昭和十六年十月親戚や近所の人たちと泣きながら別れのあいさつをして故郷から新潟経由で舞鶴港より渡満、黒龍江省通河県大古洞に入植した。

博明氏は昭和十八年現地の在満国民学校高等科を卒業優秀で卒業し青年学校に入った。そのころは軍事教練ばかり多くなっていた。昭和十九年には開拓部落から毎日のように召集があつて出征し残る老人と女子と子供ばかりの家族がふえて困った。二十年八月十日にソ連が襲来し、十七歳から四十五歳の男子全員召集となり、博明少年も家族と別れて応召となった。

ソ連の空襲で街も桂木斯の駅は爆破されて火の手があたり黒煙濛々、駅前にも集中する避難民は支離滅裂、そうした中にソ連の爆撃にあつて死傷者続出し阿鼻叫喚の巷と化した惨状である。博明氏らは桂木斯の特設警護隊二千人とともに日本人避難民を護送する任務で

あつた。しかし同志隊員と右往左往しているうちに一網打尽ソ連軍に拉致されシベリアで強制労働三年間、一日たった三百グラムの黒パン一つで空腹と寒さの栄養失調での労働で同志はばたばたと死んでゆく地獄のシベリア生活を生き抜き、運よく昭和二十四年引き揚げて故郷の悪質土砂まじりの飛行場を開拓地にあてがわれ、山積みした負債開拓団の組合長に推されて瀕死になつた組合財政の再建に貢献した博明^{いさお}氏の勲しは、かつて父親が親戚から縁を切つて満州に行き、また引き揚げてからは満州などへ行つたからと言われたことにある。在天の父親の霊を慰めた孝養は涙ぐましい。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

終戦の日を迎えて

静岡県 杉山茂代

昭和二十年、戦争が激しくなり、どこの家庭も父親

は兵隊に行き、家に残つたのは母親と子供たちだけでした。私は当時十歳でした。母と私は時々父の好きな食べ物をついばい持つて牡丹江の兵隊さんの宿舎で「在郷軍人」だった父と面会しました。

あるとき、父に会つた嬉しさで大はしゃぎだった私は、一匹の蠅を追つて蠅たたきを振り回していたら兵隊さんの背中に止まつたので無中で叩いた。父は急に立ち上がり、直立不動の姿勢で敬礼をした。母の顔色がさつと変わった。その兵隊さんは一番偉い人だったので。父と母の動きを見て、私もハツとした、どうなるのかと。兵隊さんは振り向いて、にっこり笑いながら、「とれたかね」と言った。私は「ごめんなさい」と謝つた。今は亡き父をヒンヤリさせたエピソードです。

私の家は祖父と祖母に父と母、小学校四年生の私を入れて五人家族、そして親戚のおばさんたちとその子供を含めて、老人、女性八人、子供十二人が行動を共にしました。

戦争が激しくなるにつれ近所の方々も引揚げを始め